第　７５　号

平成２２年８月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住　職　髙　橋　敬　行
電話　048-584-0302

お盆の行事

お盆のはじまりは、目連さまが母を救った故事に由来する。『仏説孟蘭盆経』という経典がもととされています。この経典の主人公は、お釈迦さまの弟子で神通第一とされた目連さまです。

ある時、目連さまは神通力を使って亡き母がどうしているか見てみました。哀しいことに、母は餓鬼世界で苦しんでいるではありませんか。餓鬼世界は食べることも水を飲むこともできない苦しみの世界です。母は全身、骨と皮ばかりの姿になっていました。

どうしたら母を救えるのか、目連さまは、お釈迦さまに助けをもとめました。お釈迦さまは「目連よ、お前の母は罪が重い。人に施すことをせず、自分勝手な人間だった。だから餓鬼道におちたのだ」とさとされました。（目連さまの母は、決して悪人ではありませんでした。ただ、とても貧しく、子供も多かったため、自分の子供たちのことで精いっぱいで、とても他人の子供のことを考えるゆとりなどなかったのです。）　お釈迦さまの教えにしたがい、目連さまは、七月十五日に諸仏衆僧に供養して、母の追善供養をしていただきました。その結果、母は餓鬼道から救われました。　この話がお盆のはじまりとされています。

私たちが、ふつうにお盆と呼んでいるのは、正式には孟蘭盆と呼びます。孟蘭盆とは梵語（昔のインドの言葉）　のウランバナを音訳したものです。音訳とは言葉そのものに意味はありません。日本でも昔はアメリカのことを「亜米利加」と書いたりしていましたが、それと同様です。

ウランバナとは、「倒懸」と訳されています。意味は「さかさまにつるされた苦しみ」と説明されています。もし自分の先祖が、そのような苦しみを受けているといたら、なんとしても救ってやりたい、生きているものであれば、そう願わないものはいません。お盆は苦しんでいる先祖の霊をなぐさめたいという心から生まれた行事だといえます。

日本では、お盆休みが夏休み

日本で一番長い休みはお盆休みと正月休みです。毎年、お盆の時期になるとみられる「民族大移動」。都会で働いている人々が、この休みを利用して故郷に帰ることを、こう呼んでいます。お盆は帰ってこられる御先祖さまを供養する期間です。御先祖さまと同時に、この世にある人も帰ってきます。故郷には、なつかしい父母、兄弟、友人、知人が待っています。いまでは、ほとんど使われていませんが「ヤブ入り」　という言葉があります。嫁にいった娘や商家などで働いている子供たちが戻ってくる日です。旧暦の七月十六日と正月でした。

いまでは信じられないかもしれませんが、昔の奉公人は、ほとんど休みという日がありませんでした。待ちに待った日、それがヤブ入りです。「藪入り」という字を見ても、まさに、都会から緑深い故郷に帰ることを意味しているといえます。

このように、日本人の生活習慣の中には、お盆の考え方が根底にあるのです。

迎え火（十三日）　精霊棚を飾り、夕方になったら盆提燈に火をともし、御先祖を迎えるために、家の門口などで火を焚きます。また、地方では、十三日の夕方に御先祖が眠るお墓に出向いて迎え火を焚き、その火を盆提燈に入れて持ち帰るという例もあります。これを「迎え盆」といいます。

お墓参り（十四日、十五日）　この期間に御先祖のお墓参りをされたらよいでしょう。しかし、お墓参りは十四日と十五日に決まっているわけではありません。都合によっては他の日でもかまいません。　精霊棚にも故人の好物などを供えるようにします。お供えするものが決まっている所もあるようですが、家族の食べるものでもよいでしょう。

送り火（十六日）

十六日の夕方、家の門口で焚く火を、送り火といいます。この日は十三日に訪れた御先祖の霊がお帰りになる日です。送り火は御先祖があの世に帰って行く時に迷わないように照らしてやるわけです。

地方によっては村全体で河原などで大きなかがり火を焚き、村おこしの事業として行っているところもあるようです。御先祖を送る、という本来の主旨は忘れたくないものです。京都の大文字焼きも、ただ枯草を焼いているというわけではありません。あれも、じつは送り火なのです。

お盆の準備

空海の言葉　シリーズ

身病の要は、四大と、鬼と、業なり

「秘密曼荼羅十住心論」

●●●体の病気の根本は、体をつくる四つの元素と、心の病気と、いままでの行ないの六つである。

肉体の四苦とは　「生老病死」といって、生まれる苦しみ、老いる苦しみ、病気になる苦しみ、死の苦しみのことです。そのうちの「病」ですが、これは四百四病といわれるほど種類が多く、どの病気にかかっても嫌なものです。

人間の肉体は「地水火風」の四大という四つの要素から成り立っている、といわれます。「地」は骨とか肉をつくっている硬いもの、「水」は水分、「火」は体温、「風」は呼吸です。よく弔詞で、「四大不調を訴えておりましたが、遂にあえなく……」などと読んでおりますが、この　「四大」とは以上にあげた四大のことです。弘法さんは、「病気というものは、四大の調子が悪くなることだけが原因ではなく、鬼と業もともに原因となるのだ」といっておられます。

鬼というのは、心が鬼になること、鬼の心をもつことです。

次に業というのは、人間の生活の、積み重ねのことをいいます。清潔で規則正しい生活をしていれば、病気にはなりません。医者が治せるのは身病だけで、其の力では鬼病や業病は治らないのです。